

第17次 CMC カンボジアスタディーツアー2013 報告書

キリングフィールド、トゥールスレーン収容所（2日目）

3班 松本侑子

・キリングフィールド

入ってすぐ目につく慰霊塔には現在 8961 の頭蓋骨が年齢別におさめられている。これらの骨はフィールド内の 128 個の穴（地上で発見されたものは約 80、湖の中で発見されたものは約 40）に埋められていた。一番大きな穴には 450 体もの遺体が埋められていた。

殺害方法は大人と子供とで異なる。大人は竹、ナイフ、毒のある植物のドゲなどで首を後ろから殴られて殺害される。子供は足首をつかまれ宙吊りにされた状態で振られ、頭を木にぶつけさせられて殺害される。殺害は囚人 1 人に対して 3 人がかりで行われる。実行する人、死亡を確認する人、書記、の 3 人だ。彼らは小学 1.2 年生の田舎の子供であることが多い。ポル・ポトによる教育を受けた子どもたちだ。殺害は夜に行われる。朝や昼では部外者に見つかる可能性があるからだ。さらに、殺害するときには音が周りに漏れないようにするため音楽を鳴らした。

囚人たちは当初トラックに乗せられてこのフィールドに連れてこられたが、ガソリンの価格が上がったため約 15km 歩いて連行された。囚人は目隠しをされ手足を縛られた状態だった。囚人の多く（特に女性や子供）はなぜ自分が逮捕されたのかもわからないまま殺害された。

・トゥールスレーン収容所

もとは中学校だったのをポル・ポト派が占拠し収容所にした。学校にあった遊具は拷問の道具として使用された。酷い拷問方法をすればするほどポル・ポトが喜んだ。しかし、拷問の途中で囚人を殺してしまうと拷問を行っていたスタッフも次の日から囚人になる。その囚人に自白させたくないことがあるのではないかという疑いがかけられるからだ。

拷問には 2 種類ある。1 つ目は身体的な拷問だ。例えば鞭打ちや電気ショックがある。2 つ目は精神的な拷問だ。例えば壁に描かれた犬の絵に何度もお辞儀させたり、自分を裏切り者だと思込ませる。

収容所は A、B、C、D の 4 棟ある。A 棟は幹部など地位の高い人用、B 棟は一般人の中でも罪の重い人用、C、D 棟は一般の人用である。B、C、D 棟は 1 日 2 食で拷問は主に外で行われた。しかし A 棟は 1 日 3 食で拷問は室内で行われた。

女性スタッフは罪がなくても一定期間で殺害された。なぜならポル・ポトらの秘密を知ってしまう可能性があるからだ。

<チュンマイさんのお話>

チュンマイさんはポル・ポト派の制服をつくる普通のスタッフだった。しかしベトナムの

車の修理をしてほしいと言われて連れてこられたのがこの収容所だった。収容所ではまず履歴書を書き、身体調査を行う。続いて目隠しをされて手を縛られズボンを脱がされ、独房に入る。独房に入るために歩くときは耳をつかまれた。耳を引っ張ることで階段などの合図を送っていた。独房に入ると拷問が始まる。そこでは全く身に覚えがないことを尋ねられる。(例:CIAについて) 拷問内容は変形するまで指を叩かれたり、足のつめをはがされたり、右半身に電気ショックをかけられた。その後遺症として今でも耳に水が入ったような違和感を感じたり、目が良く見えない等がある。拷問は12日間行われた。独房は個室で足枷をつけられる。トイレは独房にある使用と尿用の箱にする。使用の箱は元は銃の弾を入れるための箱だ。もしこれらの箱にうまく用をたせず床にこぼしてしまった場合は、自分でそれを舐めなければならなかった。食事は1日2食、朝と夜におかゆのみ。空腹のため独房に入ってきたゴキブリやネズミも食べた。また、拷問による傷で背中が痛み仰向けに寝ることができず横を向いて寝ると、足枷でどうしても音を立ててしまう。その音を兵士はチュンマイさんが逃げようとしている音と勘違いし、200回の鞭打ちを行った。12日後、独房から雑居室に移動しその雑居室にいてる人々とキリングフィールドに向かうはずだった。しかしチュンマイさんはワープロの修理ができたためそのまま収容所で働かされた。一緒に雑居室にいた囚人たちはおそらくキリングフィールドに連れて行かれ殺された。なぜ逮捕されたのかはわからない。しかしチュンマイさんが逮捕される少し前に彼の上司が逮捕されたためその時にチュンマイさんの名前を出してしまったのかもしれない。家族はどこかに連れて行かれてすでに亡くなっている。

CMAC 地雷犬トレーニングセンター (3日目)

トレーニングセンターはプノンペンから約90km離れたところに立地しており、宿泊施設も完備されている。ここでは地雷の分解、地雷犬のトレーニング、新しい機械のテストや調整、証明書発行など地雷除去に関する様々な活動を行っている。もとはUNTACの一部だった。現在JICAの支援をもとにミャンマーやラオスの地雷撤去にも協力している。

地雷犬の種類はシェパードで外国から来ている犬が多い。犬種はカンボジアの気候に合うかどうかで決まる。最低2歳からトレーニングを開始。犬がトレーナーに慣れるのに3か月、訓練に8か月必要とされる。訓練終了後、現場では約8年間働くことができる。犬1匹に対しトレーナーは1人で固定制。犬とトレーナーは常にともに生活するため、宿舎も犬と同じ。犬への指示はその犬の出身国の言葉を使用する。

見学したトレーニング方法はレンガの中に1か所だけ火薬を入れその場所を見つけさせるものと、室内で12個の入れ物のうち1個に火薬を入れその入れ物を見つけさせるものだ。トレーニングでは地雷原をまっすぐ歩くこと、地雷を見つけたときちゃんと後ろに座ることが重要となる。トレーニングだけでは犬のストレスが溜まるので、毎朝水の中で歩かせたりハードルやタイヤをくぐる遊びをさせたり、トレーニングがうまくいったときにはゴム

のおもちゃをやって褒める。

MAG 地雷原視察（4 日目）

説明して下さったのは M6 の責任者トゥートロイさんと M3 の責任者ジャンモニーさんの 2 人。現場は Thnal Bat Village。バタンバンから約 106km、1 時間 45 分のところにある。1986 年に誕生し、ポル・ポト時代には内戦現場となった。ポル・ポト時代は武器を運ぶ道として使われた。パリ条約締結後の 1993 年にもここでポル・ポト派による内戦が行われている。地雷被害者は 9 人と牛 1 匹。9 人の詳細は不明。現在 34535 m²撤去作業が終了した。その地域からは 9407 個のスクラブと 59 個の地雷が発見された。作業が終了した土地は村の人々にあげる。今までで 9 家族 56 人に土地が渡された。川が近いため雨季の撤去作業は難しい。地雷原は地雷の種類によって 4 つに分けられている。視察は地雷埋設量が比較的多く実際に被害があったブロックの周囲に行った。視察当日 6 個の中国製の対人地雷が発見され、爆破に立ち会った。M6、M3 はそれぞれ 16 人で構成されており、ここで撤去活動を行っているディマイナーは合計 32 人。女性は 12 人。撤去作業は縦 60cm×横 25m の長方形を 1 人で金属探知機を使用しながら行う。その長方形の中で探知機が反応するものを見つけるとまず赤い丸のマークを置く。長方形内すべて探知機をかけた後、そのマークのあるところを掘っていく。作業で使用する 60cm ほどの様々な色の棒は、青色がこれから撤去作業を始める合図、黄色が対人地雷が処理された場所を示す合図、オレンジ色が不発弾が処理された場所を示す合図、緑色が地雷の一部が見つかり未処理の合図、赤色が対戦車地雷が見つかり未処理の合図、をそれぞれ示している。地雷がさかさまに埋まっていたり、傾いていたりする場合は下から掘っていくため爆発する場合もある。しかしプロテクターをしているため重体にはならない。

ディマイナーになりたい。私がディマイナーになって 1 つでも地雷を取り除けばカンボジアは平和になる。根拠もなくそう信じており、実際に現場を見てみようと今回のツアーに参加した。だが、当前何の技術も持ち合わせていない私はディマイナーにはなれない。さらに地雷を 1 つ取り除いたところでカンボジアがまるっきりよくなるわけでもない。地雷問題はさまざまある問題の中の 1 つに過ぎないからだ。ツアーを通してそれらを知ったわけだが、それを知るきっかけとなった 2 つのツアープログラムの感想を書く。

1 つ目はやはり地雷原訪問。良い意味でも悪い意味でも期待を裏切られた。地雷原はあまりにも穏やかで過酷だった。地雷原の数十メートル先では小屋が建ちバイクが走り子供が水遊びしている。空も日本と変わらず青く風も気持ち良い。不謹慎かもしれないが全く緊張感が持てなかった。一方でディマイナーの仕事のハードさは想像以上だった。日本の夏の暑さを超える暑さの中、重いプロテクターとヘルメットを着用し数時間の作業。私は 1 時間その状態で立っただけでくたくたになった。しかし私が驚いたのは作業ではなくディマイナーの生活だった。その地域の除去が終わるまでその場で野宿。食べ物はその日にとれたもの。電気も何もなかった。そんな中でも女性のディマイナーがたくさんいらっしやった。格好良かった。

2 つ目は小学校の訪問。小学生らとさんざん駆け回った後、帰りのバスの中で説明を受けた。“この小学校に在学する学生の 1/3 は学校に来られない。その主な理由の一つとして人身売買が行われているから。” その小学校の周辺ではタイに人身売買が行われ、不法入国等の理由から母国に帰れず、子供たちは買われたところで虐待を受け続ける。先ほどまで一緒に遊んでいた子供たちが虐待されている姿が容易に想像できてぞっとした。カンボジアが抱える問題は地雷だけではない、地雷が消えたからと言って全て解決するわけではない、と知った。

今回のツアーで本当に様々なことを知り体験した。知ったことだけに満足せず知ったから何ができるのか、日本に戻った今模索している。このような機会を与えてくださった CMC の皆様本当にありがとうございました。